

E—7 乳幼児の生育に関する調査にみる地域差 の家政学的課題

女子栄養大家政 末広 和子

1. 本研究は隣接科学の一つである社会学の立場で行なわれた調査資料に家政学の課題の考察を試みたものである。

2. 調査資料は家族問題研究会が家庭のしつけを主題として一昨年に山梨県八代町と東京杉並区で行なった調査（この結果を比較分析したものは第9回国際家族研究セミナーおよび昨年の日本社会学会で「都市と農村、性と年齢の相違における家庭のしつけの比較研究」として報告された）に加えて、本年3月同じ調査を同研究会によって東京台東区で行なった、その結果の一部である。

調査方法は面接調査、対象は2～5歳児を長子にもつ父親または母親である。本報告に用いる内容は、出産、授乳、離乳、排便、養育関係者などに関する事項についてである。

家政学の課題の考察に当たっては、家政学に、④家族ならびに家庭生活に展開する諸事項、諸事象の科学的究明、⑤隣接諸科学ならびに、④の成果を家庭生活の場面に適用して諸事項、諸事象の適正な遂行につかう技術の研究、③学校教育やマスメディアその他社会教育等への貢献、という三つの立場があるものとして調査結果をとりあげた。

3. 地域差の最も著しいのが出産の場所である。母乳不足が都市にきわめて多く、授乳態度の意見と行動のズレにみる地域差、家族形態がこれらの調査項目に与える影響等、いずれにも、④⑤③の立場からさらに研究、検討の必要が認められた。